

国産ワイン

一般的には日本国内で製造されたワインを指す。輸入した濃縮ブドウ果汁やワインを国内でブレンドするケースが多い。国税庁によると2010年度、国産ワインの原料に占める国産ブドウの割合は約25%。神戸ワインは神戸産ブドウ100%使用の純国産ワイン。山梨県で昨年7月あった国産ブドウのみを使った「国産ワインコンクール」には、全国98ワイナリーから過去最多の717点が出品された。

長らく耕作されていない荒れた農地を、ワイン用のブドウ畑として再生させる取り組みが広がっている。評価を高めつつある国産ワインが、日本の農業を救う一手になるかもしれない。

農地ワインが救世酒

荒れ地 ブドウ次々

国産人気後押し 特区利用も

今秋に初収穫

高さ1〜2メートルに育った苗木は今、厳しい寒さを耐え、花の咲く初夏を待つ。初めての収穫は今秋の見込みで、育ちのいいブドウを醸造し、新酒ワインをつくる予定だ。

農家の高齢化やブドウの価格低迷で担い手が減り、羽曳野市で1990年に290畝あったブドウ栽培面積は、2005年は4分の3に。植え付けは、点在す

昭和初期にブドウの生産量日本一を誇った大阪を支えた羽曳野市。奈良県境に近い飛鳥地区で昨春、まだまだかな斜面にある0・5畝の遊休地に、10年ぶりにブドウの苗木が植えられた。ワイン用のメルローや甲州、ソービニオン・ブランなど4種類計約600本。

昭和初期にブドウの生産量日本一を誇った大阪を支えた羽曳野市。奈良県境に近い飛鳥地区で昨春、まだまだかな斜面にある0・5畝の遊休地に、10年ぶりにブドウの苗木が植えられた。ワイン用のメルローや甲州、ソービニオン・ブランなど4種類計約600本。

「国産ワインの評価が高まりつつある今、いいブドウが育つ土地が使われない



ブドウの木が植えられた畑で昨夏、栽培体験をする人たち。大阪府羽曳野市、府提供

ままなのが歯がゆかった。市内のワイン会社「飛鳥ワイン」の仲村裕三社長(54)は言う。今後遊休地を活用し、栽培面積を拡大する予定だ。

荒れ農地を整備し、ワイン用ブドウを栽培する動きは全国に広がる。

長野県東部の東御市では、かつてワイナリー(醸造所)の醸造長も務めた小山英明さんが一昨年、リンゴ畑だった雑木が茂る土地約3・6畝を開墾し、自前のワイナリーを開いた。

後押ししたのは東御市。荒れ農地の活用とワイン製造を結びつけようと、小規模ワイナリーが開けるようになる「ワイン特区」を国に申請。08年に認定された。小山さんは特区利用の第1号だ。市によると、ワイナリー開設を目指し、ブドウ栽培から始めたいとの相談が県内外から来ているという。